

米芾（1051～1107）宋の三大家のひとり。

字は元章、名は「黻」、1091年以後「芾」の字に改めている。
襄陽漫仕、海嶽外士、鹿門居士、海岳、などの号がある。

官職名から南宮とも呼ばれる。（米南宮）

齋号（書齋の名前）を宝晋齋といった。

湖北省の襄陽で生まれたが、先祖はソグド人亡命者と言われる。

※ソグド人は中央アジアに住んでいたイラン系の民族。

科擧の試験を受けなかったが、20歳の時、

宮廷に仕えていた母のおかげで秘書省校書郎となった。

その後、下級官吏として各地を転々とした。

53歳で書が認められ太常博士に、54歳の時書画学博士となる。

同年、書画学博士をやめ、礼部員外郎に昇格したが、縁故人事を指摘され、

55歳の時、淮陽軍の知事となり、翌年、淮陽軍の官舎で没した（享年57歳）

米芾の業績その他

蘇軾も黄庭堅もエリート政治家であったが、米芾は書画の専門家として生きた。

水墨画の「米法山水」（米点）の創始者である。

米芾は江南の山水を愛した。

自ら篆刻をした書画家の最初の人といわれる（印はハンコ屋が彫っていた）
優れた収蔵家であり、中国史上最高の鑑識眼のもちぬしといわれる。

臨本作成の達人（偽作づくりの名人）

前代までのあらゆる書を学び、それまでの書を総合した。

技量は宋代一と言われる。

古典の字を異常に探求したばかりに「集古字」と貶された。

書の伝統を確立した（二王を中心にした晋人の書）。

『書史』『画史』『硯史』『寶章待訪錄』『寶晋英光集』などの著作がある。

『海岳名言』は米芾のことは後人が編集したものらしい。

多くの奇行のため「米顛」「米痴」と呼ばれた。

奇岩愛好癖（奇石を拝む）

潔癖症（手を洗って自然乾燥）

唐代のオールドファッションで暮らした。

硯マニア（徽宗の硯の話、蒐集狂）

書画癖（蔡京の子の蔡攸の「王略帖」の話）

偽物作りを楽しむ（本物と見分けがつかないほどの臨模の技術）

米芾の「しじは」

「硯を洗い、一本の軸を展げて鑑賞していると、
雷が近くで鳴っても気がつかない」

「毎日、晋唐の真蹟を机の上に広げない日はなく、
夜はそれを枕元に置いて寝た」

「一日、書を書かないと、思考が鈍るように感じる」



「米芾拜石図」陳洪綬



米芾遺愛の硯
台北・故宮博物院蔵



伝・米芾「春山瑞松図」



米芾像（三才図会から）

米芾の学書歴（どのように書を学んだか）

古典の字をただ集めて書いただけ、と貶され「集古字」と呼ばれた米芾は、自らの学書歴について述べている。

（「自叙書学」「学書帖（行書帖）」などと呼ばれて、『群玉堂米帖』に収められている）

「七、八歳の頃に顔真卿を学び、つづいて柳公権の金剛經を学んだ。柳公権の書風が欧陽詢より出ていることがわかったのでつぎに欧陽詢を学んだ。つづいて褚遂良を学んだ。これを最も長く学んだ。そして段季展を慕い学んだが、段が蘭亭序から出ているのが分かったので法帖（淳化閣帖）を看することにして、晋魏の平淡の趣をとり入れ、鍾繇の四角な字を捨てて、師宜官を師とした。さらにさかのぼって篆書は咀楚文、石鼓文を好んだ。また竹簡は竹を筆とし、漆で書いたものであり、しかも鐘鼎の銘は古老の美に妙なることを悟った。壁に書く字は、沈伝師をもつて主とした。しかし、小字は大いにとらない、大いにとらない。」と述べている。※宋代に漢簡の発掘があった。

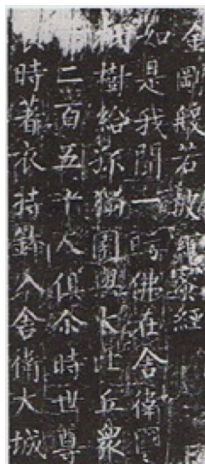
米芾の書の遍歴は中唐から初唐、晋、魏、秦漢とどこまでも溯っている。

米芾はいろいろな古人の長所をとり、それらを総合し、自分の書をつくりあげたと言っている。（既に老いて始めて、自ら家を成すなり）

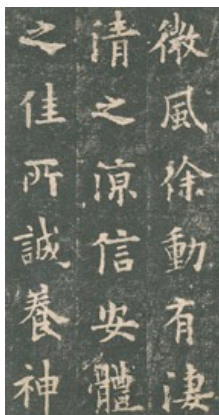
顔真卿 「顔氏家廟碑」部分 780



柳公権 「金剛般若經」部分 824年



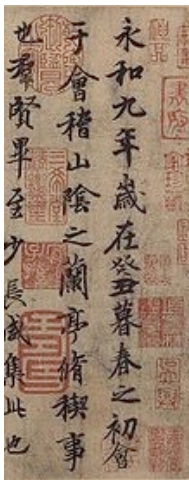
欧陽詢 「九成宮醴泉銘」部分 632年



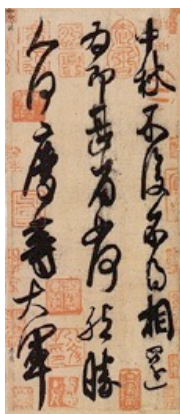
褚遂良 「雁塔聖教序」部分 653年



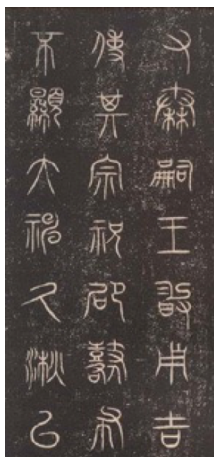
王羲之 「蘭亭序」部分 353年



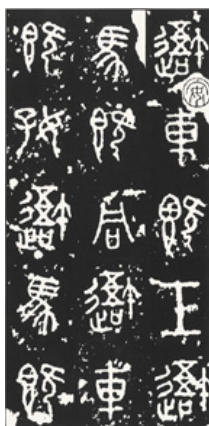
王献之 「中秋帖」



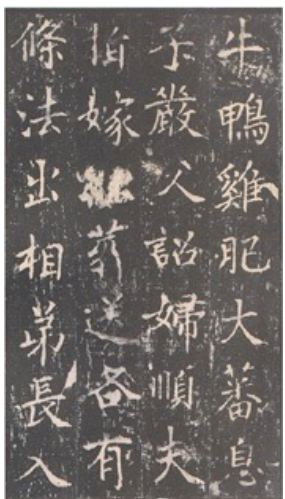
「詛楚文」部分

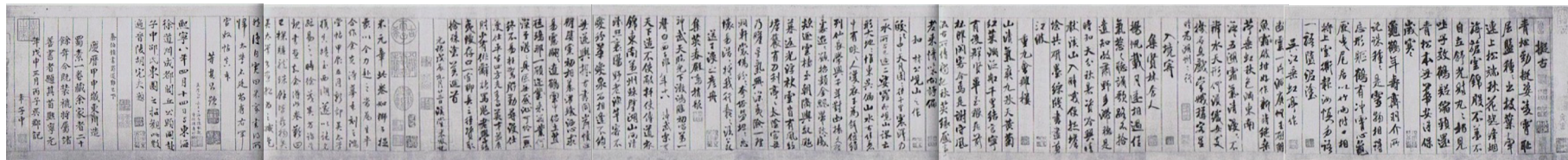


「石鼓文」部分 紀元前374年頃？



沈伝師 「柳州羅池廟碑」 823年？





織り目（冒頭部分）

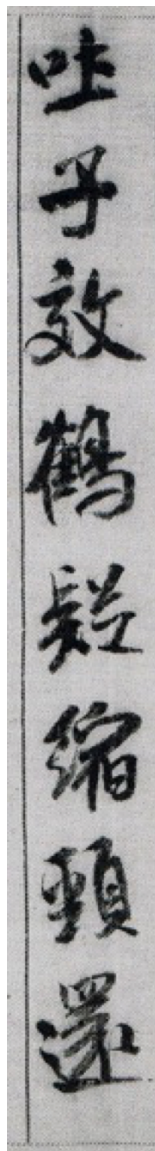
（冒頭部分）



縦画が行の流れを作っている

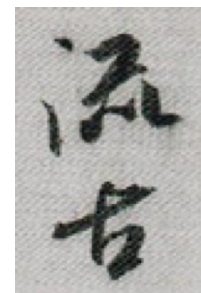
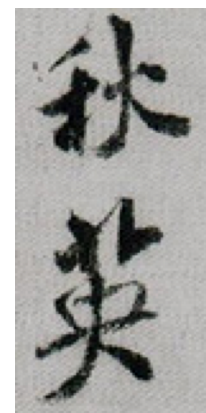
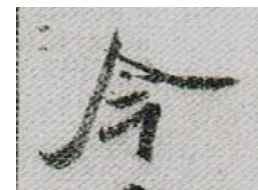


同じ幅の字が等間隔に連なるピッチカートのような行構成

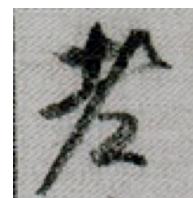


結構法の特徴

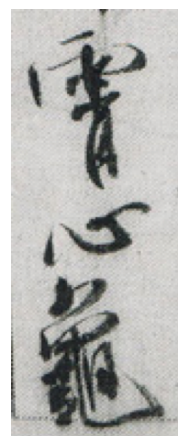
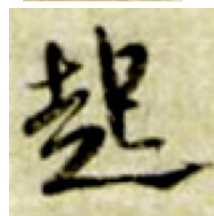
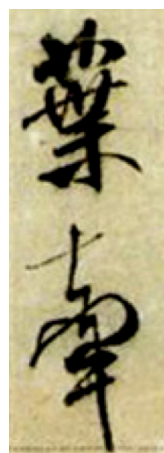
右上がり強い



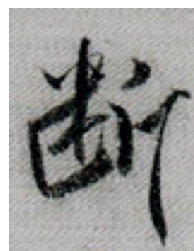
左上部を強くする



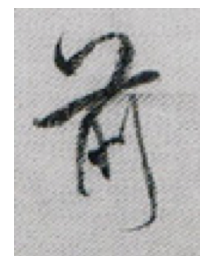
左に傾いている



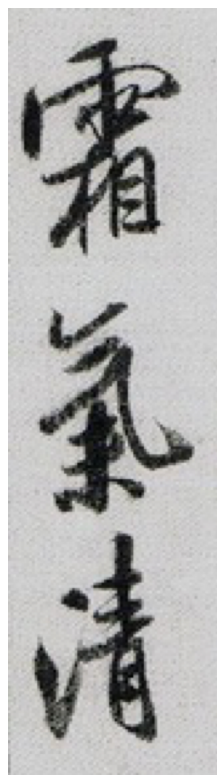
縦画が背勢



縦横の画を伸ばす。横画の左が長い。



縦長の字形が多い



偏と旁がくつついている



シンニョウは前屈し、三画目の起筆は露鋒



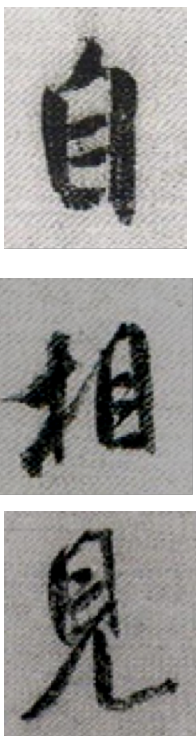
サンズイやニスイは余白を作らないようにしている



並んだ画は筆づかい(起筆、筆圧、そりかた、方向など)を変えている



目などは上部の余白を広くとっている



包みこむような冠。二画目が大きく三画目の横画が細い。



一字の中の肥瘦の変化



基本点画

横画（露鋒、藏鋒、逆筆、側筆、中鋒とまぎれである）



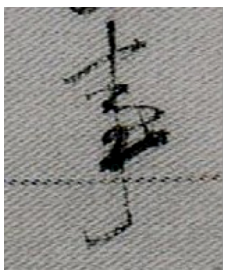
縦画5種（背勢、直勢、左右にうねるものなど）



転折は円味があるものが多い（打ち返しのあるものなど6種ほどある）



はね（代表的なもの4種）



左はらい（強さの源の一つ）



右はらい



点法



「書を学ぶにはまず執筆を一番に考えるべきで、自然に筆が持てた次は、筆を使いこなすことが大事である」(米芾)

ちようけいしかん
苕溪詩卷

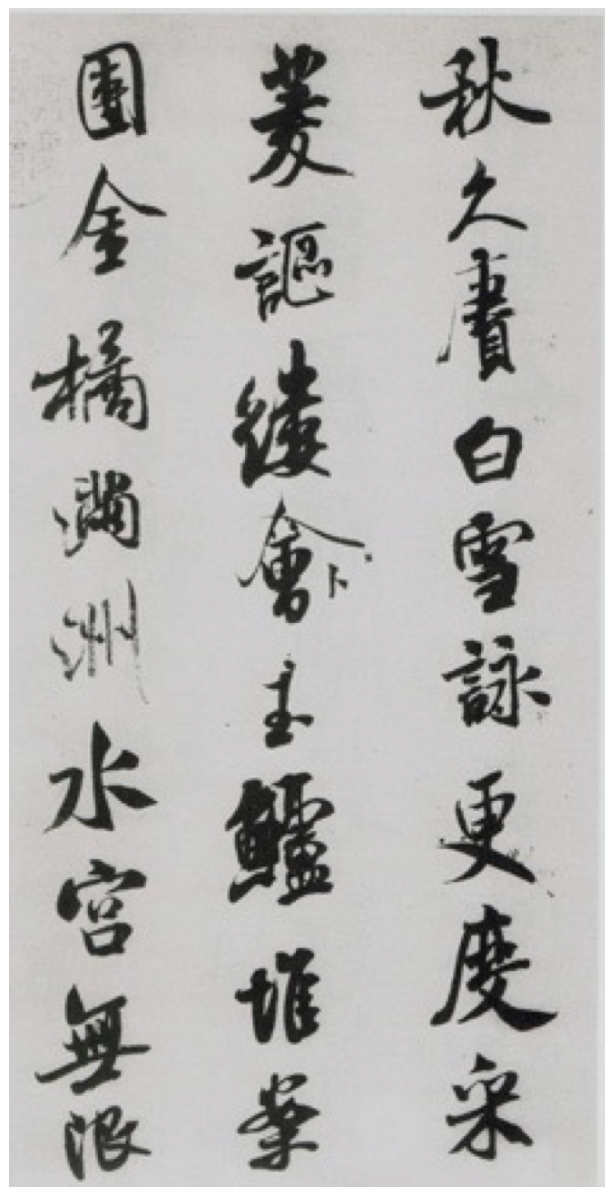
1088年(元佑3年) 真蹟 米芾37歳の行楷書 卷子 紙本

「蜀素帖」の一ヵ月ほど前に書かれたものである。

林希に招かれて苕溪に遊びに行くときに友人たちに贈った自作詩が書いてある。

五言律詩六首を澄心堂紙に35行で書いてある。

「蜀素帖」とともに米芾独自の書風が作りあげられている。

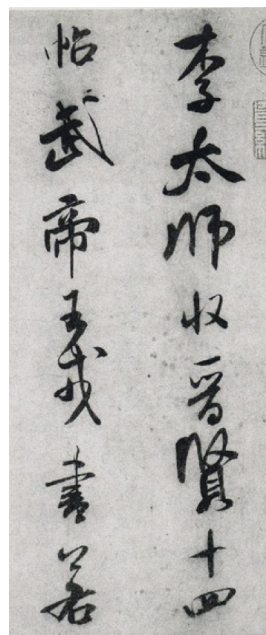
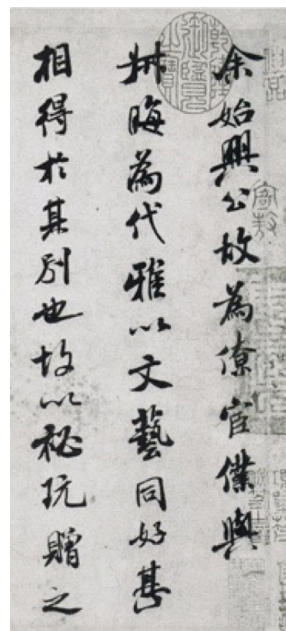
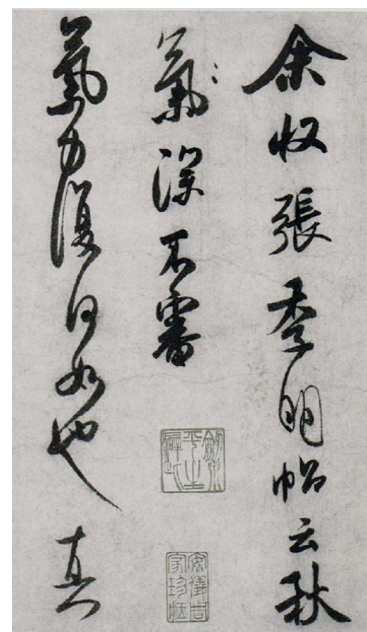


部分

行書三帖

「真蹟三帖」ともいう。東京国立博物館蔵

「張季明帖」「叔晦帖」「李太師帖」を合装したもの。



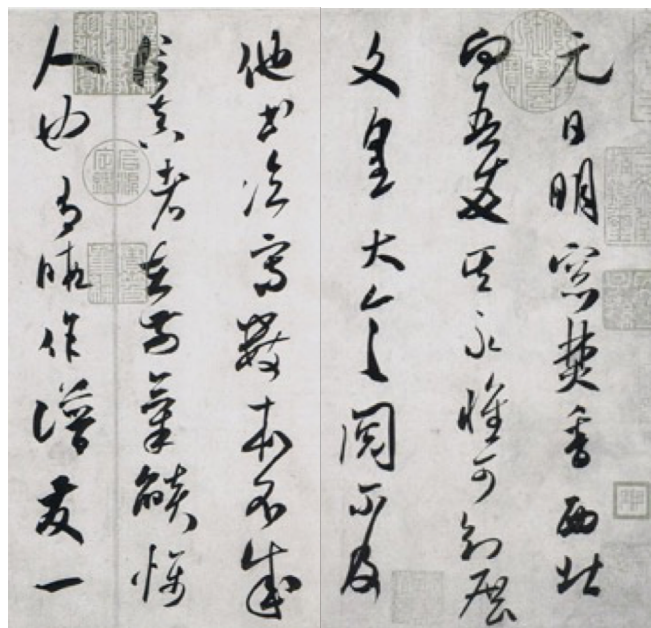
草書四帖

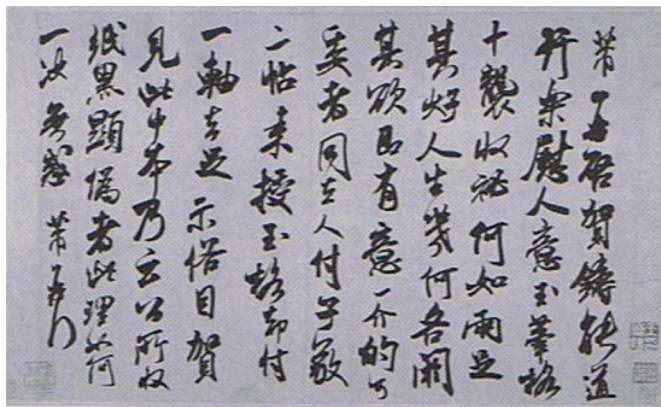
大阪市立美術館蔵

「元日帖」「吾友帖」「中秋詩帖」「目窮帖」「海岱帖」の五帖からなるが、「中秋詩帖」と「目窮帖」が1帖と

されたため四帖と呼ぶ。「元日帖」「吾友帖」「海岱帖」は尺牘（手紙）である。「中秋詩帖」「目窮帖」は詩である。

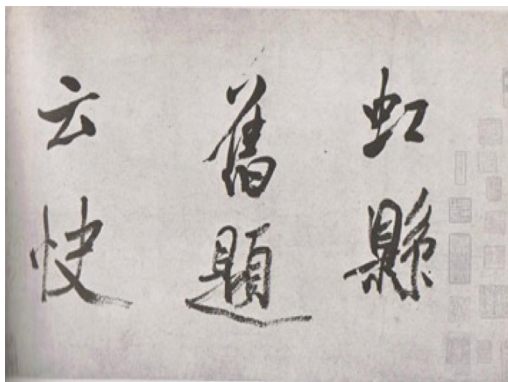
46、47歳頃の作か？





虹縣詩卷

最晩年の行書 紙本 約縦31×490 東京国立博物館蔵



部分

虹縣 舊題 云快



霽 天 清

柔らかい白紙（白綿紙）に大字で書かれている。十紙をつないでいる。つなぎ目（紙縫）には米芾の印が押してある。

巻末に元好問らの跋文がある。

米芾が虹縣に遊んだときの旧作の詩一首と再遊した時の詩二首を書いたもの。

第一首目

「虹県旧題に云う。快霽一天、淑氣清し、健帆千里、碧榆の風。満缸の書画、明月と同一にす、十日隋花、窈窕の中。」

筆勢から表れる潤渇の対比表現が見事である。

米芾の特徴は内に蔵されて、右上がりもきつくなき、あまり左に傾いていない。

はねの表現がおもしろい。

用筆は多彩で自由自在である。

多彩ではあるが基本的には中鋒であり線質は強い。

露鋒に比べて逆筆藏鋒の用筆が多くなっている。

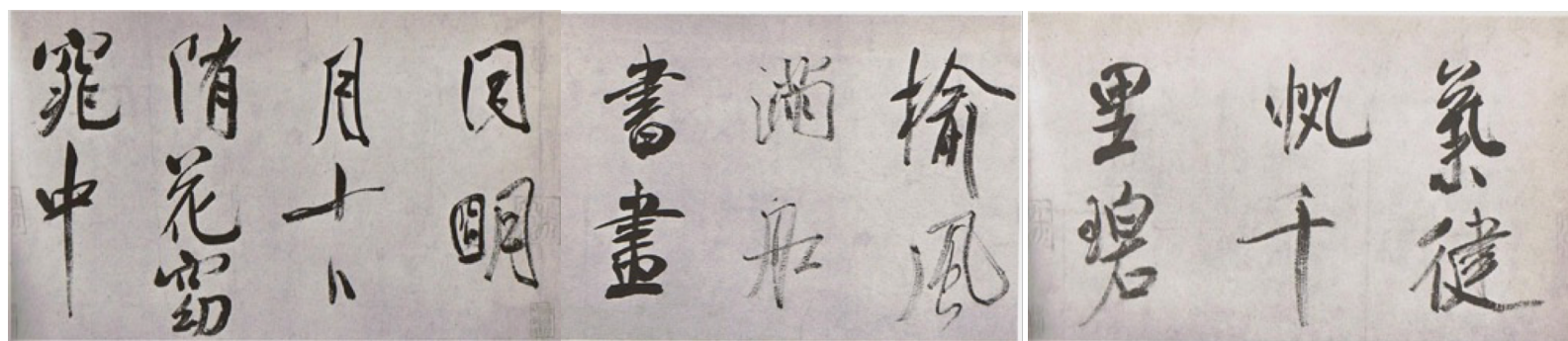
宋代の美意識

調和や秩序や均整の美から変化や動きや力強さへ、

米芾は最もそれらを体現していた書家であった。

しかし米芾は晩年にゆくほど力強さと変化の中に均衡と調和の美を実現していった。

米芾は年齢を重ねるとともに衰えることなく逆筆、藏鋒、側筆、露鋒など自由自在に筆を使いこなしている。



(宿題) 唐の四大家の名前を挙げ、各大家の代表的な楷書作品を比較して、それぞれの書風の違いと各大家に共通した原理を説明せよ。

解答の長短は問われないが説得力あるレポートを提出すること。締め切りは次回もろもろ塾。